青年期の自我発達と自我体験について

高　石　恭　子

Ego-development in Adolescence and Ego-experience

TAKAISHI Kyoko

はじめに

人はまず，心理的に未分化な自他融合状態としてこの世に生まれ，2～3歳頃までに自分と他者の区別の恒常性を獲得することが知られている。例えば Mahler (1975) は，“分離一個体化”という概念を用いて，この時期の発達過程を乳幼児の直接観察から理論化している。分離一個体化の達成は，いわゆる“自我の芽ばえ”“第1反抗期”に相当し，自我発達にとって最初の重要な節目である。

更に成長が進むと，人は自分の中に，“自らに語りかけるところの主体としての自我”と“語りかけられるところの客体としての自己”を見出すようになる。それまで自分の中に一体となって埋没していた両者の間に亀裂が生じ，“主体としての自我”の存在を取り出して対象的に把握できるようになる。これが，Spranger (1924) が“自我の発見”“第2の誕生”と呼んだ，自我発達の大きな第2の節目である。(自我という用語の定義は研究者によって一定していないが，特に断らない限り本論では“意識・経験の主体”という慣例的な意味で用いる。)

このように考えると，人間の自我発達は連続的・直線的なものではなく，いくつかの質的断層を含んだ段階的・曲線的変化であると言える。特に第2の節目については，第1次大戦前後の青年心理学者が“精神的青年期の始まりを示す危機的性質を帯びた変化”として注目して以来，多くの心理学的研究がなされるようになった。

一方“青年期”とは，産業革命以降の近代社会において初めて問題視されるようになった，文化的要因の大きい時期である上，身体的（性的）成熟という生物学的要因を前提とした概念でもあるので，両者との関連を抜きにして青年期を語ることは不可能である。初期の青年心理学者達が“自我の発見”と呼んだ事柄は，現代の青年期初期の人々がそれを体験するのとは異なった時期と様相を呈していたに違いない。発達加速現象，学習期間の延長，などにより現代の青年期は前後に広がりを見せている。いつまでも“大人にれない”青年の増加は，“遷延された青年期”(Blos; 1962)，“アイデンティティの拡散”“モラトリアム”(Erickson ; 1959) などの表現を通して比較的早くから問題として取り上げられて来た。それには，青年期終期の問題が，就職・結婚などの社会的現象として外から見えやすく，理解されやすかったとも一因としてあるだろう。ところが，“早すぎる青年期”に突入してしまった青年の場合については，青年はまだ充分に語るべき言葉を持たず，変化も外側から見えにくいため，身体的早熟や現代の競争社会の厳しさといった要因が，青年期の開始にどのような影響を及ぼしているのか解明されていない部分が多い。

最初に述べたように，自我の質的・構造的変化を青年期開始のメルクマールとして考えるならば，現代の青年期初期の人々は，その変化をいつ頃，どのように体験し，乗り越えていくのであろうか。

近年の欧米やわが国での精神的疾患の増加と低年齢化は，第1次大戦来の青年期理解——例えば小学生を“潜在期”という心理的安定の時代と捉える伝統的な精神分析学の理解も含めて——では，もはや対応しきれないことを如実に示している。そのような臨床場面からの要請によって，心理学よりはむしろ精神医学の立場から，青年期初期に焦点を当てた新しい青年期論が構築されてきている（小此木；1980)。しかしながら，この問題は精神医学のみならず，教育の分野全体に関わる問題としても認識されなければならない。

そこで，ここでは青年期の自我発達に関するこれまでの研究を概観し，また関連領域からの知見を参考にしながら，青年期初期の研究方法の新しい可能性と今後の方向性について考察してみたい。

1　これまでの青年期の自我発達研究の概観

自我発達における第2の大きな節目に最初に注目したのは，第1次大戦前後の一連の青年心理学者達である。Spranger (1924)，Bühler, C. (1926) らは，日記や自伝的小説の事例的検討をもとに，青年期の初めに起こるこの節目の変化を，劇的かつ危機的なものと特徴づけた。特にSpranger の“自我の発見は自我と外界との葛藤を生み，青年を苦悩の中におとし入れる”という見解は，当時の青年一般の特質として，広く人々の心の中に浸透していたと考えられる。

次いで，第2次大戦後になると，精神分析の流れを汲む Erickson (1959) が，乳幼児から老年期に至る一貫した自我発達理論を提示し，その中で青年期を“自我同一性の危機”の時代として位置づけている。(但しここで用いられている自我とは，厳密には精神分析的な意味であり，自我同一性とは，家族同一性・性同一性などの各同一性を統合する機能としての自我に即した概念である。) 1960年代以降，この理論に基づいた自我同一性の実証的研究が，Q分類法，質問紙法等によって多数行なわれるようになった。わが国でも，砂田 (1979)，遠藤 (1981) らは，自我同一性尺度を作成してその達成度及び混乱度を測定しようと試みている。

また，同時代のもうひとつの流れとしては，Rogers の自己理論（村瀬；1970）を発展させ，自己概念と適応との関係を実証しようとする立場がある。Rogers は，自己概念の矛盾や撞着を解消することが適応的生活を可能にすると考え，心理療法の成果を自己概念の測定によって実証しようと試みた。ここから，理想自己と現実自己の discrepancy（ずれ)，Self-esteem，自己受容度等を測定するものを始め，もっと包括的な自己概念（あるいは自己像・自己意識）を測定するものまで，多彩な研究が生まれている。

これらの理論に共通しているのは，青年期が“自我の対象的把握”というそれ以前とは質的に異なる自我意識の誕生によって始まり，自我の再構成と新しい段階への統合に向けて苦闘する危機的な時期である，という認識である。Rogers の自己理論には発達的観点はとり入れられていないものの，彼が大学生を主対象とする臨床経験からこの理論を立てた経緯を考えると，上のような青年期の危機の認識が前提として含まれていると推察して差し支えないと思われる。

ところが，1960年代後半になり，主にアメリカで，伝統的な危機説を反証する形で“青年期平穏

説”が唱えられ始め（村瀬，1976），一般青年の多くが何ら危機を体験しないでこの段階を通過する，という調査結果が発表されるに及んで，青年期の危機性をめぐって，それまでの研究は見直しを受けることとなった。しかしながら，自己概念や自己像といった，統計的手法を駆使した研究においては，実証性を重んじる余りに，年齢による差異は客観的に細分化された形で測定できても，青年自身がその変化をどのように体験し，意識しているかについては殆ど知ることができず，当然のことながら，危機性という問題からも遠ざかる結果となっている。

そのような実証的研究の一面性，末梢性に対する批判と反省から，再び日記（山田；1979），伝記（西平；1981）や手記（中村；1981，藤土；1980）などの事例的手法が再評価されるようになった。しかしまだこの手法による研究も，予備的・探索的段階の域を脱しておらず，青年期についての共通の理解を得るには至っていない。具体的な問題としては，(1)研究対象の青年の数が限られていて一般化が困難であること，(2)理論的枠組のはっきりしないものが多く，個々の研究がそれぞれ個別の理解にとどまっており，相互の関連づけができないこと，(3)対象の青年が殆ど高校生・大学生で，自我発達の移行期として筆者が重視している青年期初期については，信頼できる結果が得られていないこと，等が挙げられる。

1970年代になると，以上のような統計的・実証的研究と事例的研究の両者の問題を解消する方向で，折衷的な新しいアプローチがいくつか試みられるようになった。その中でも最も注目されるのは，Marcia の考察した“自我同一性地位面接”であろう。これは，半構造的面接によって対象を，“同一性拡散”“早期完了”“モラトリアム”“同一性達成”の4つの地位（status）に分類する手法で，その分類は危機や傾倒（commitment）の体験の有無に基づいて行なわれる。この手法は，青年が自我を再構成し，新しい自己の再定義に至るまでの過程を力動的に解明することを可能にした点できわだっているし，高橋（1984）も，“同一性地位面接が多数の研究を誘発したのは臨床的深さと検証的厳密さの相反する要請を最適に均衡させて類型した点に求められる”と述べて，有用性を評価している。

しかしながら，ここから生まれた研究もまた，主に大学生を対象としている。Archer（1982）は，従来のアイデンティティ（同一性）研究を概観し，初期及び中期青年期は“最初の同一性活動の時期と見なされるにもかかわらず，その時期を対象とする研究を行なっているのは Meilmann（1979）のみである”と対象の偏りを指摘し，自らも，6～12年生（12～18歳）の男女160名に自我同一性地位面接を施行して，6年生の中にも既に同一性達成の段階に評定される者を見出している。わが国でも，下山（1981）が青年期初期を重視する観点から，“自我同一性達成”を“自分の確立”と平易に表現し直して，中学生にもこの面接を応用することを試みている。

但し，この手法を用いた研究も，結局は自我同一性の形成過程よりも，現時点での対象の地位の決定と特徴づけ，という静止的構造に主眼が移ってしまっているばかりでなく，本来アイデンティティという概念が，青年期から成人期へと移行する時の社会的役割取得の達成に重点を置いて形成されたものであることを考えると，児童期から青年期にかけての変化過程を探るには不適切な手法であると言わざるを得ない。

折衷的研究の例としてもう1つ挙げておきたいのは Loevinger の自我発達理論である。Loevinger（1970，76）は自我を，“人が自らや世界を意味づける枠組“と捉え，衝動統制，対人関係様式，自己概念を含む意識的とらわれ，認知様式，の4つの諸側面を柱とする包括的な発達理論

を構築している。これは，精神分析，道徳性，パーソナリティ，対人関係などの先行理論と研究を総合し，整理し直したもので，着想自体は新しいものではないが，この理論における彼女の面目は，“自我発達の多くの特徴は質的に規定される”という主張の下に，生涯にわたる自我発達を，7つの段階と3つの過渡的段階に分類設定したことであろう。その中で，児童期から青年期にかけての段階は，“同調的段階”“自己意識的（過渡）段階”“良心的段階”と命名された部分にあたる。

例えば，自己意識への捉われ，という側面について同じ低得点を示した者がいるとして，その者の全体としての発達段階が“同調的段階”にあるならば，その者はまだ児童期の幼い自己意識の段階にとどまっていることを意味するし，“良心的段階”にあるならば，既に過渡期の自我の混乱と再構成を経た後の，安定し成熟した自己意識の段階に進んでいることを意味する。このように，Loevinger の理論は，量的得点と質的段階の両者を同時に捉え，得点の質的意味づけを可能にした点で評価されるべきだと思われる。実際 Loevinger は自論を実証するために，“自我発達 SCT”という手法を考察し，検討を重ねている。わが国でも佐々木（1980，1981）らによって研究が進められている。しかしながら，SCT という手法は，同調的段階より下の層には施行できないという難点があり，また良心的段階より上の層（成人にあたる）には施行しても年齢との発達的対応が明確に見出されないことから，研究対象はここでも高校～大学生に限られており，まだまだ発達的に一貫した研究とはなり得ていない。

以上のように，これまでの青年期の自我発達研究は，その基盤となる理論や用いられる手法にかかわらず，総じて青年期後期を中心に取り扱ったものとなっている。

2　児童期から青年期初期にかけての自我発達研究の試み

青年期初期，あるいは児童期から青年期にかけての一貫した自我発達研究が積極的に試みられるようになったのは，1970年代後半以降，自己像・自己概念の測定など一連の統計的・実証的研究の発展としてであった。例えばアメリカの National Testing Service は 1973 年に“自己観察尺度”（(1)自己受容　(2)自己安全　(3)社会的成熟　(4)社会的信用　(5)学校との関係　(6)教師との関係　(7)仲間関係　(8)自己主張　の8つの下位尺度より成る）を開発しているが，Ellis & Davis（1982）はこの尺度を用いた Stevens（1975）や Katzenmeyer & Stenner（1975）の因子分析的研究を検討し，”自己概念は6歳から10歳までの間は安定しており，11歳で分化と拡大（多次元化）が始まり自己概念が再組織される”と，青年期の開始を11歳に規定している。また，17～18歳の頃には“8つの次元（下位尺度で表される）が安定した自己概念として結晶化する”と次の段階的変化についても述べ，児童期から青年期後期に至るまでの自己概念の発達を，因子構造の変化という観点から実証していることは注目に値すると思われる。

しかしながら，青年期を自我発達においてそれ以前とは質的に異なったひとつの段階として考え，青年自身によってその段階的変化がどのように体験されているか，ということを解明していくためには，それらの研究は超え難い限界を有している。客観的かつ量的に測定できるという利点から，急速な発展と細分化を生んだ“自己”研究であるが，そもそも“自己概念”“自己像”と言う時の自己とは自我によって意識された客体としての自分の側面に限定されている。それ故，いくら測定方法を厳密にしても，Loevinger が問題にしたような質的な差異を引き出すことは困

難なのである。この点を解決していくためには，“自己”の側面に拘泥することをやめて，主体としての“自我”が自己の諸側面をどのように捉え，どのように関わっていこうとしているのか，もう少し両者の力動的な関係に目を向けていくことが必要ではないだろうか。

同様の観点から，Damon & Hart (1982) は，従来の欧米の自己概念研究を批判し，“自己理解”という新しい用語を用いて幼児期から青年期までの統一された発達的モデルを提出している。Damon らの言う“自己理解”とは，“ある人の持っているIとMeの概念の全体性”——つまり，主体としての自我と客体としての自己双方に対する理解——を意味し，自己理解の発達とは，自我と自己の多様な相互作用を繰り返しながら上の段階へ進んでいく過程を意味する。ここでDamonらがIとMeと呼んでいるのは，self を2つの側面に分け，体験を純粋に主観的な方法で組織し，解釈する“I”(self-as-knower) と，self の構成要素として物質的自己・社会的自己・精神的自己を含む“Me”(self-as-known) と名づけた James, W. の理論を踏まえているからである。但し James は，“I”を問うことは哲学の分野であり，心理学的分析の対象は，“Me”とされるべき，という結論を出しており，Damon は，このことが近年の心理学研究者達に同じ方法論的誤りを繰り返させる要因となったのではないか，と指摘している。確かに，“I”そのものに対して直接心理学的（特に実証的）な接近をすることは不可能であるかもしれない。しかし，“Me”を通して，“I”に接近すること，あるいは“I”と“Me”の関わりあい方を理解していくことは，自我発達研究上の不可欠な要素と言わねばなるまい。

以上のような観点から Damon らが構想した“自己理解”の発達モデルは，“発達段階”と“I”と“Me”の3次元構造として立体的に表現されている。発達段階は，(1)幼児期及び児童期前期 (2)児童期後期 (3)青年期前期 (4)青年期後期，の4つに分けられ，“I”は連続性・独自性・意志・自己の対象的把握の4側面，“Me”は James の3つの自己に“行動的自己”を加えた，やはり4側面から関連づけが行なわれているが，ここでも自己理解の質的変化は(3)と(4)の段階の間に起こるとされている。その段階設定の根拠となっているのは，Secord & Peevers (1974), Broughton (1978), Selman (1980) らの面接や自己記述の分析を基にした研究であるが，それらによると，最初の発達的移行は青年期の開始時に起こり，“self's awareness of its own awareness”あるいは“自己の経験を監視し，積極的にコントロールしようとする global notion of the I の獲得”として特徴づけられる，とされている。この awareness により，自己意識は増大し，特定の行動や性質ではなくて，抽象化や一般化によって“I”の観点から自己を記述することができるようになる。

このような青年期の捉え方は初期の青年心理学者達の考え方と一致するものであるが，残念なことに，この理論独自の発達的研究法はまだ考案されておらず，各段階がおよそどの年齢に対応するかも明記されていないため，まだ妥当性が実証されるところには至っていないと言える。

さて次に，わが国に目を移してみると，児童期から青年期にかけての移行期に焦点を当てた自我発達研究は殆ど見当たらない。これはひとつには，この年代が研究対象として児童心理学と青年心理学の狭間に属し，一貫した研究に載せられる機会があまりなかったこと，もうひとつには，文章表現能力の未熟さから，わが国で従来行なわれていた自己概念や自己像研究の手法をそのまま用いることができない，という方法論上の困難があったこと，が原因として挙げられるだろう。敢えて取り上げるとするならば，Zazzo の“発達の力動検査”を用いた都筑 (1981) による小学

生の自己意識の研究と，身体的変化との関連から小学校高学年の自己概念の変化の認識を問う加藤（1984）の研究がある。前者は幼児の研究から対象を上に発展させてきたもの，後者は逆に長年の青年期研究の一貫として対象を下に移動させてきたものであり，ごく最近になって児童研究と青年研究が互いに接近し始めたことは評価されるべき動きであろう。しかしながら，加藤の研究でも，思春期の身体発達（加藤は身長伸び率が最大となる女子では9～10歳，男子では11～2歳を思春期の開始と設定している。）と自己概念の変化との間には明確な対応は認められず，青年期開始の指標の選び方等，今後の方法論的問題は未解決のまま山積している状態と言える。

3　自我体験について

ここで，青年期初期の自我発達研究のひとつの新しい手がかりとして，“自我体験”の概念を取り上げてみたい。Bühler（1926）は，日記や自伝的小説の分析から，青年期初期に起こる自我の質的変化が青年自らの深い体験となっている場合があることを見出し，それを“自我体験”と名づけて，“思春期に起こる自我の構造的変化の突然の意識化”“自我を突如その孤立性と局限性において経験すること”と定義している°（Bühler の言う思春期とは，一般に青年期と呼ばれている時期の前半部分を指し，例えば女子の精神的思春期は11～2歳から17歳の初めまでにあたる。）

わが国においても西村（1978）が若干の事例を加えて自我体験の考察を行なっている。西村によれば自我体験とは，(1)内なる自己との出会いの体験で，自然体験や，空想とか，自分が開ける体験という形もとり得る。(2)一種の啓示的体験で，一般には起こりにくい。急激な自我体験は知性的な強い自我を持った人によって経験され，時には自殺や離人体験にもなり得る危険を伴うものである。(3)精神的思春期の始まりを示し，12～3歳頃に起こるものである。(4)自我体験を中心的な基礎として自我が統合され，成長して17歳以降の青年期後期を迎える。

また，類似の概念について Blos（1971）は“自己意識の体験”と名づけ，小説を具体的に例示して，“思春期におけるこれらの体験は人間の実存にとって最も深刻なものである。”と述べている。Blos の引用した例は18歳の青年で，思春期の初めとは言えないが，自我体験は Bühler や西村の強調するような，1度限りの劇的で特殊なものではなく，むしろ一般には，部分的な体験をいくつか繰り返し積み重ねていくことで完了する，と考えれば理解できることである。Rollo-May（1958）も，自我体験を実存主義的観点から“I-am” experience と名づけ，その体験を“自我発達の前提条件”“心理療法的問題解決の先行条件”として重要視している。このように，自我体験は年齢にかかわりなく，人生の発達途上で危機的状況が生じた時に，体験し直されていくものではないだろうか。ただ，その体験が初めて意識上に浮かび上がってくる可能性のあるのが青年期の始期であり，初めてであるが故に，強い危機性と劇的性格を帯びるのである。更に具体的な例を追ってみよう。

Jung, C. G. は外的年齢と対応した発達論は構築していないし，青年期についても特に論じてはいないが，自我体験に相当する彼自身の体験については，自伝（Jung; 1963）の中に記されている。彼は生来の強い感受性と知的早熟さの故に，11歳で入学した学校で不適応を起こし，他の生徒に突き倒された事件をきっかけとして意識喪失発作を伴う神経症状態となり，半年余り学校に行けなくなる。しかし彼は神経症に甘んじることなく，孤独に耐えながらそれと戦い，克服し

ていったのである。自我体験はその克服の過程，12歳の時に起こった。少し長くなるが引用してみよう。

——私は長い道をたどって学校へ行っていた。その時ふいに，ほんの一瞬間だったが，私は濃い雲から出て来たばかりだという抗しがたい強い印象を受けた。私にはすぐにすべてのことがわかった。今や，私は私自身なのだ！それまでは，まるでもやの壁が私の背後にあるようだった。そしてその壁の後には，まだ「私」はなかった。けれどもこの瞬間，私は自身に出くわしたのである。以前，私は存在してはいたけれども，すべてがたまたま私に起こっただけだったのである。それが，今や私は，私自身に出くわした。今や私は，私が自分自身であり，今，私は存在しているのだということを知った。以前は，これやあれやをするように命じられていたのだったが，今や私は，自分の意志を働かせるようになったのである。……つまり，私の中に「権威者」がいたのである。——

Jungはこの時の“私”と壁の後ろから現れ出た“私”を人格No.1とNo.2と名づけ，この体験が2つの人格の対抗的な動きを全生涯にわたって追跡していく原動力になった，と述べている。No.1とは，今ここに現存し，外界と関わったり，勉学や仕事に熱中する“私”のことであり，No.2とは，No.1に影のように付き添いながら，独自の自律性を持ち，透徹した生命力と永遠の時間を有する“私”のことである。Jungにとっては，恐ろしく，No.1の理解に余るような夢を送ってくる創造主であり，歴史的な精神内容を受けついだ霊的存在であった。自伝の中では，はっきりと関連づけて述べられてはいないが，彼が最初にNo.1とNo.2と名づけた人格の2つの側面は，Jungが後に概念化した“自我”と“自己”の両者に相当するのではないかと思われる。ここで言う自己とは，慣例的な“自我によって捉えられた客体としての自分”ではなく，Jungがの特性として述べたように，自我とは別個の独自の法則を持ち，意識と無意識の両方を含んだ心の全体性を意味している。

Jungの概念を用いて自我体験の説明を試みるならば，それは，“意識の中心である自我が，無限の時間的・空間的広がりを持った自己と言う内的世界の全体性の中にはっきりと位置づけられ，自我が自己と新しい結びつきを獲得して，より高次の統合性に向かう原動力となる体験”と言える。西村は，自我体験が宗教体験の性質を持つと指摘しているが，“自己”をJungのように霊的な——すなわち内なる神という——性質を持つものとして考えるならば，自我体験が，Ottoが“ヌミノース体験”と名づけたような神秘体験と重なることも，よりよく理解されてくるのである。

さて，以上のように自我体験（及びそれに相当する体験）は，初期の青年心理学以来繰り返し重要視されてきた中心的課題である。その体験をどのように持つかは，青年期及び成人期以降の生き方に大きな影響を及ぼすに違いない。自我体験について探求を続けることは，前述したような青年期研究の諸問題——すなわち，青年期前期に重点を置いたアプローチの必要性，自我と自己あるいは質と量の総合的理解の必要性など——を解決していく1つの糸口となるのではなかろうか。更にJungのような観点を織り込むことによって，従来の自我—自己の考えを超えて，無意識や心理療法における自己実現のプロセス，といった深い理解にまで発展させることができるのではないだろうか。

ところが，これまで自我体験は，強い自我を持った特殊な人々に起こる“1回きりの劇的な啓

示的体験”として強調されすぎてきたために，個々の事例的記述にとどまり，実証的研究には全く載せられてこなかった。しかし筆者は自我体験はそのような1回性のものではなく，むしろ小さないくつかの部分的体験の積み重ねとしてなされていく，あらゆる人々に普通に起こりうるもの，と考え，その部分的体験の積み重ねの度合いを測定するために“自我体験度”という尺度を作成して，この概念を一般の児童期から青年期にかけての人々に応用することを試みた（宮脇；1984，86）。

筆者が Bühler や西村その他の自我体験に関する記述と事例から，自我体験の下位概念として抽出したものを列挙すると以下のようになる。(1)孤独性（自我を外界から分離・隔絶されたものとして感じること）(2)独自性及び自律性（自我を単一・独自の有限なものとして認識し，また内的な権威を発見しそれを重視すること）(3)自然体験（自己の気分の外界への投影として，自然を幸福と美として意識すること）(4)自我意識（自我の対象的把握あるいは自我と自己の分離の意識）(5)変化の意識（過去との断絶感及び未来への展望）(6)空想嗜好（内界への集中的関心と，1人で空想に耽ることへの嗜好）

筆者はこのような6つの下位概念について，それぞれそのような体験の有無を問う質問紙尺度を作成し，（小学生版17項目，中高生版34項目）自我体験度として得点化すると共に，“最初に”起こったと思われる体験の種類と時期（年齢）・契機，更に体験時の自分や周囲の人々，世界に対する感情と体験後のそれらの変化について記述させ，現代の青年期初期の人々の自我体験の過程を，より力動的・全体的に把握しようと試みた。筆者のとった方法は，Bühler が提出した“体験”という多次元構造の包括的な概念を得点化し，実証的理解を固める一方，体験内容を記述させ，実証的研究では間接的示唆しか得られない“危機”の問題にも迫ろうとする，折衷的観点に立ったものである。これらの筆者の研究から明らかになったことの一部を要約しながら，現代の青年期初期の人々の自我体験について考察していくことにする。

まず，対象となった小学校中学年～高校生約千名のうち，殆どが何らかの部分的体験を想起し，それらのうちの最初の体験は10歳頃の年齢に生起したと答えた者が最も多かった，という点である。自我体験を青年期の始まりとして規定するならば，青年期の開始期は Bühler の時代よりも早まっているということだろうか。西村（1978）が挙げた自我体験の例の中には，9歳，10歳時のものが含まれているし，その他にも現代の例として金井美恵子（1983）は小2か小3時に自我体験に相当する体験をしたことが自伝的に語られている。また，そのような特殊例のみならず，筆者の研究対象となった一般の小学3年生の中にも，既に自我の対象的把握が可能になっていると認められる体験例がいくつか見出されているのである。

9～10歳頃が心理発達上の1つの質的転換期にあたることは，描画，創造性，言語習得，ロールシャッハ研究，及び精神医学など，関連する多くの領域から報告されている。そして，これらの経験的知見を，Piaget（1964）や田中（1984）らの認知発達理論を基に体系化しようとする試みもなされている（加藤；1979，81）。確かに，自我を対象的に把握するためには，抽象的思考の獲得，という認知的発達・知的成熟が前提としてなければならない。しかしながら，認知的発達の基盤は，自我体験の必要条件であっても，決して十分条件とはなり得ない。筆者は，Damon ら（1982）が“自己理解の発達的説明を一連の認知的次元の変化に帰してしまおうとする誘惑に抵抗したい。そのような説明は，自己理解発達の本質を捉え損なうだけでなく，個体発生的パタ

ーンの複雑さを過少評価する恐れがあるからである”と述べているのと同様の観点に立っている。

次に，自我体験の契機についてであるが，従来 Bühler や Freud によって強調されてきたような第2次性徴に関連する身体的変化を答えた者は殆ど見られなかった点である。性的成熟は，ホルモンバランスの変化や衝動の高まり等を通して，自我体験の生起を促進する刺激として作用するのは確かであろうと思われるが，少なくとも意識レベルでは重要な契機として捉えられることはない。このことが，前述の加藤（1984）など身体発達と自己概念の関連を求める研究の困難な理由のひとつとして考えられる。意識的には，きわだった契機として挙げられているのは，友人との関係——特に親しくしていた友人・仲間からの一時的な孤立——と，勉学の困難化——これこそ現代的要因であろう——である。

また，自我体験の危機性について言えば，日常生活に支障をきたすほどの激しい混乱の経験を述べた者は僅かであったけれども，体験時に自分や他者への強い否定的感情と，混乱を経験した者の割合は概ね5～7割の高率であった。このような混乱と否定性を危機として捉えるならば，やはり一般的にも危機的性質を有すると考えてよいのではなかろうか。特に現代の女子においては，性的成熟の時期が始まり，9～10歳頃には乳房がふくらみ始め，中には初潮を経験する者も出，抽象的思考の獲得という“知的成熟”と第2次性徴の発現という“身体的成熟”の時期が近接するに至っている。このことは，安定した児童期の自我の充分な成長を待たずに，自我の再構成が迫られる，という現代的事態をもたらし，自我体験の持つ危機性を増大させていると考えられる。

おわりに

本論では，従来の青年期の自我発達研究を批評的に展望し，“自我体験”という概念を用いた新しい研究法が提出され，有用性が考察された。もちろんこの研究法もまだ探索的段階であり，特に測定面の厳密さには多くの問題を残しているのだが，”体験”という観点を筆者が敢えて重要視するのには，以下のような理由があることを付け加えておきたい。

精神医学の分野において，神経症や精神病が成人型の発症へと移行する臨界点が10歳前後の年齢にあることが，近年の経験的知見として言われている（山崎；1980，大井；1978）。また，田畑（1985）は小2で“早すぎる自我体験”をし，その体験を未解決のまま持ち越して（新しい自我による統合に失敗して），高2で発症した登校拒否児の事例を挙げている。笠原（1976）もまた，特に離人症などの患者が回顧的に青年期初期の“変身（症状の初発）体験”を述べることが多い経験から，“われわれ精神科医にとっての問題は，もしそのような非連続的屈曲点があるとすれば，およそ何歳ぐらいか，その屈折的変化は精神衛生的な意味で有効に利用できないか，ということになろう”と，体験を問うことの意義について述べている。これらは，心理学・教育学の立場からも同様に言えることである，と筆者は考えている。

最後に，自我体験の生起（筆者の研究では10歳前後）すなわち青年期の始まり，と結びつけてしまうことは，従来の青年期の捉え方からすれば疑問の残るところかもしれない。この点については，やはり精神医学の分野からであるが，Blos（1962）やSullivan（1940）らの提出した概念が解決への示唆を与えてくれるだろう。現代では，児童期（潜在期）は短縮され，従来の青年期

（性器期）との間にどちらにも区別し難い中間地帯が生まれてきている。その時期には，外面的には児童期との大きな変化は認められないけれども，内面的には自我の再構成という大仕事が始まっている。Blos はこの時期（10～12歳）を“前青年期”と名づけ“第2の分離一個体化”の始まりの時期として捉えている。Sullivan もこの時期（10～14歳）を同じく“前青年期”と命名し，“chumship（同性同年代の親密な友人関係）”の成立によって，他者との比較を通し，自己の人格のそれ以前に生じた障害を自己修復し得る時期，として重要視している。これらの観点から，“自我体験”は，青年期初期というよりむしろ，前青年期的できごととして考えていく方が適切かもしれない。現代の青年の自我発達研究にこれからの課題として要請されているのは，まさにこの“前青年期”の理解の精緻化ではないだろうか。

引用文献

Archer, S. L. (1982) The lower age boundaries of identity development. Child Development, 53, 1551-1556.

Blos, P. (1962) On abolescence-A psychoanalytic interpretation. 野沢栄司（訳）(1971) 青年期の精神医学 誠信書房

Broughton, J. (1980) The divided self in adolescence. Human Development, 24, 13-32.

Bühler, Ch. (1926) Des Seelenben des Jugendlichen 原田茂（訳）(1969) 青年の精神生活 協同出版

Damon, W., & Hart, D. (1982) The development of self-understanding from infancy through adolescence. Child Development, 53, 841-864.

Ellis, D. W., & Davis, L. T. (1982) The development of self-concept boundaries across the adolescent years. Adolescence, 17, 695-710.

遠藤辰雄（1981）アイデンティティの心理学，ナカニシヤ出版

Erickson, E. H. (1959) Identity and life cycle. 小此木啓吾（訳）(1973) 自我同一性 誠信書房

藤土圭三（1974）青年の自我形成に関する個人史的研究 日本教育心理学会第16回総会発表論文集 518-519.

Jung, C. G. (1963) Memories, Dreams, Reflections 河合隼雄・他（訳）(1972) ユング自伝1 みすず書房

金井美恵子・木村敏（1983）私は本当に私なのか 朝日出版社

笠原嘉（1976）今日の青年期精神病理像 笠原嘉・他（編）青年の精神病理1 弘文堂 Pp. 3-27.

加藤直樹，川崎広和，森原都（1978）九・十歳の発達と教育一研究の意義と課題一 障害者問題研究，14，22-34.

加藤直樹（1981）九・十歳頃の発達と教育一聴覚障害児教育の教育課程編成上の若干の仮説一 日本教育学会 Pp.156-160.

加藤隆勝，加藤厚，斉藤誠一（1984）思春期の身体発達の開始と心理的適応に関する縦断的研究(1)～(3) 日本心理学会第48回大会発表論文集 552-554.

Katzenmeyer, W. G., & Stenner, A. J. (1977) Estimation of the invariance of factor structures across sex and race with implications for hypothesis testing. Educational and Psychological Measurement, 37, 111-119.

Loevinger, J., & Wessler, R. (1970) Measuring ego development 1. Jossey-Bass, San Francisco.

Loevinger, J. (1976) Ego development: Conceptions and theories. Jossey-Bass, San Francisco.

Mahler, M. S. (1975) The Psychological Birth of the Human Infant 高橋雅士・他（訳）乳幼児の心理的誕生 黎明書房

Meilman, P. W. (1979) Cross-sectional age changes in ego identity status during adolescence. Developmental Psychology, 15, 230-231.

宮脇(髙石)恭子（1984）思春期女子における自我体験の様相 日本教育心理学会第26回総会発表論文集 418-419.

宮脇(髙石) 恭子（1986）自我発達における小学校中学年の位置づけ (2)一自我体験度を通して一日本教育心理

学会第28回総会発表論文集　372-373.
村瀬孝雄（1970）Rogers の自己理論　佐治守夫（編）講座心理学10　人格　東京大学出版会 Pp.80-101.
村瀬孝雄（1976）青年期危機概念をめぐる実証的考察　笠原嘉・他(編)青年の精神病理 1　弘文堂 Pp.29-52.
中村雅知（1981）女子青年の自我形成　日本教育心理学会第23回総会発表論文集　508-509.
西平直喜（1981）子どもが世界に出会う日―伝記にみる人間形成物語　有斐閣選書
西村洲衛男（1978）思春期の心理―自我体験の考察―　思春期の精神病理と治療　岩崎学術出版社　Pp.255-285.
大井正己（1978）前思春期および思春期のうつ病　思春期の精神病理と治療　岩崎学術出版社　Pp.89-122.
小此木啓吾（1980）青春期・青年期の精神分析的発達論と精神病理　小此木啓吾（編）青年の精神病理 2　弘文堂 Pp.3-42.
Piaget, J. (1964) Six etudes de psychologie. 滝沢武久（訳）(1968) 思考の心理学　みすず書房
Rollo May (1958) Existence: A new dimension in psychiatry and psychology. 伊東博・他（訳）(1977) 実存―心理学と精神医学の新しい視点　岩崎学術出版社
佐々木正宏（1980）Loevinger の自我発達測定方法とそれに基づく最近の研究　心理学評論　23, 4, 392-414.
佐々木正宏（1981）SCT による女子青年の自我発達の測定　教育心理学研究　24, 2, 147-151.
下山晴彦（1981）青年期における「自分」の確立の研究　東京大学教育学部教育相談室紀要 4　109-118.
Spranger, E. (1924) Psychologie des Jugendalters.　土井竹治（訳）(1973) 青年の心理　五月書房
Sullivan, H. S. (1940) Concepts of modern psychiatry.　中井久夫・他（訳）(1976) 現代精神医学の概念　みすず書房
砂田良一（1979）自己像との関連からみた自我同一性　教育心理学研究, 27, 215-220.
田畑洋子（1985）“お前は誰だ!”の答を求めて　心理臨床学研究 2, 2. 8-19.
高橋裕行（1984）自我同一性と Marcia の同一性地位面接：批評的展望　教育心理学研究 32, 4, 320-328.
田中昌人（1984）発達における階層間の移行について　京都大学教育学部紀要　30, 119-148.
都筑学(1981) 小学生における自己認識の発達　日本心理学会第45回大会発表論文集　520.
山田良一（1979）青年期における自我発達の諸相―女子青年の日記分析の試み―　日本教育心理学会第21回総会発表論文集　246-247.
山崎晃資（1980）特定の状態を示す子どもの初回面接　児童精神科臨床 1　星和書店 Pp. 105-179.

（博士後期課程）